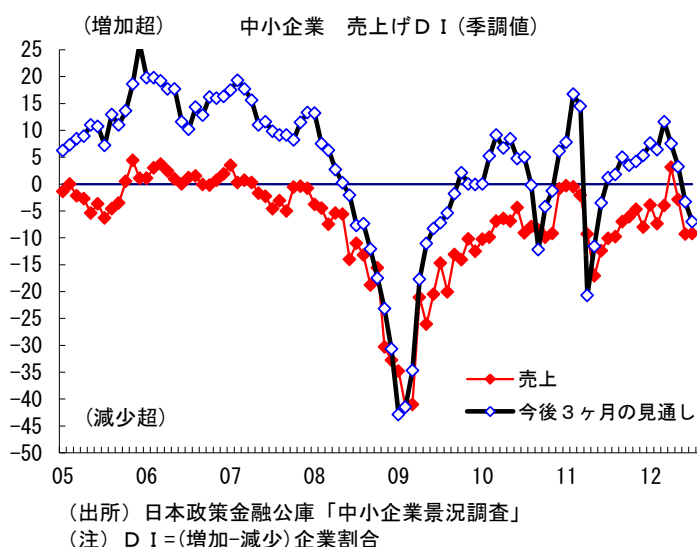
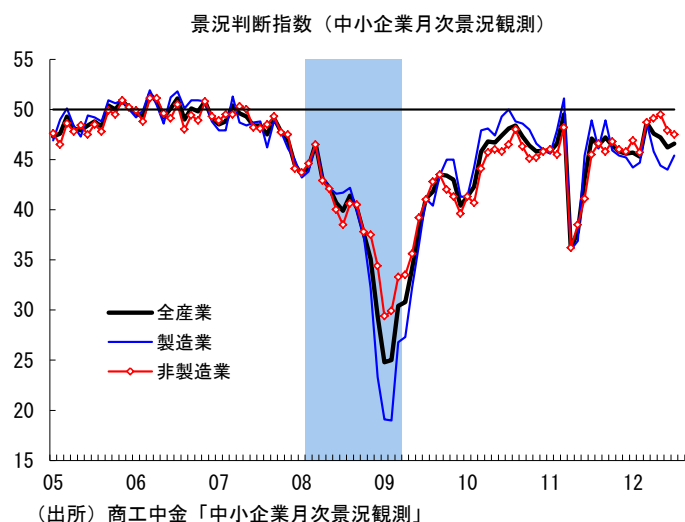


指標名：中小企業の業況(2012年7月)

発表日2012年7月26日(木)

～小幅改善も回復感には欠ける～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 エコノミスト 大塚 崇広
TEL : 03-5221-4525



○景況判断指数：原材料価格の下落を背景に小幅改善も回復感には欠ける

商工中金から公表された7月の「中小企業月次景況観測」（調査時点：7月上旬）の景況判断指数（1000社調査、以下、景況指数）は、全産業で46.6（前月差+0.2pt）と小幅改善した。景況指数は4月以降は3ヶ月連続の低下と弱い動きが続いていたが、どうにか踏みとどまった形だ。内訳を見ると、製造業が上昇した一方で、非製造業は低下した。製造業では、海外経済（特に中国）の減速感が目立つことに加え、円相場も高水準での推移が続いているが、原油価格の下落が下支えとなったようだ。業況判断をみると、7月の仕入価格は▲0.2と約2年半ぶりに下落超となり、採算状況が改善している。このように製造業は一旦悪化に歯止めがかかったものの、世界経済の回復の鈍さを背景に低水準での推移となっている。他方、非製造業は2ヶ月連続の低下となったが、小幅な低下にとどまり水準としては悪くはない。個人消費が底堅いことに加え、復興需要も景況感の下支えになっているようだ。

日本政策金融公庫から公表された「中小企業景況調査」（調査時点：7月中旬）の売上げD I（季節調整値）は前月差+0.1と僅かに改善したが、2ヶ月連続の大幅な低下の後ということもあり低調な結果である。また、3ヶ月後の見通しは4ヶ月連続で低下している。売上げD Iを最終需要分野別に見ると、衣生活関連や食生活関連が底堅さを保つ一方で、乗用車関連や設備投資関連はこのところは冴えない動きとなっている。両分野は先行きの見通しの水準も低く、今後の推移が懸念される。

○先行きの懸念材料は多い

8月の景況指数は製造業は43.4と低下、非製造業は48.3と上昇が見込まれている。製造業については先行きも回復感に欠ける動きとなろう。特に中国を中心とした海外経済の足取りが鈍さや円高を背景とした輸出の伸び悩みが景況感の下押し要因となる可能性が高い。また、8月中にもエコカー補助金制度が終了するとの報道もあり、その影響も懸念される。良好な水準を保ってきた非製造業も、引き続き復興需要などが下支え要因になると思われるが、雇用や賃金が伸び悩む中、回復の持続力には懸念が残る。

